

令和3年度 自己評価計画書(最終報告)

石川県立ろう学校

重点目標	具体的取組	主担当	実施状況の達成度判断基準	判定基準	分析(成果と課題)及び次年度の扱い(改善策等)
1 授業実践力の向上	①各教科等の見方・考え方を働かせ、教科間の連携を通して、必要とされる資質・能力の育成を図る。	○教務課 幼小中高等部	各教科等を関連させた指導を意識して学習活動を行っている教員が A 80%以上 B 70%以上 C 60%以上 D 60%未満	教職員=100% A	どの学部も縦横のつながりを考えながら、授業づくりを行っていた。今後も教員が情報交換のしやすい環境の中で、各教科や学部間で情報共有し、つながりをもちながら授業づくりを行うことを継続していくことが課題である。
	②「一人一研究授業」を行い、聴覚障害教育の専門性や授業力の向上を図る。	○研修課 幼小中高等部 寄宿舎	期間内に、授業参観や意見交換をした回数 A 3回以上 B 2回 C 1回 D なし	教職員=98% A	小中学部での一人一台端末の導入により、授業を参観する視点として重要視する教員が増えた。アプリ等の活用を実際の授業で目にする事によって、自身の実践に生かしている姿が多く見られるようになってきている。また、板書や発問、幼児児童生徒への言葉かけを視点として参観する教員も多く見られた。ICT端末の使用と並行して板書をどのように計画していくかは、これからの授業づくりにおいても検討が必要である。互いの情報交換がより活発になっていくとよい。学部を越えて参観したことにより、幼児児童生徒の育ちや、今後育てていきたい姿について見通しもつ機会にもなっている。今後も互いに授業を参観する視点を明らかにしながらオープン参観をはじめとする授業参観、意見交換の場を積極的に設けていきたい。
			授業に満足している児童生徒が A 80%以上 B 70%以上 C 60%以上 D 60%未満	児童生徒=91% A	前期と同様に評価はAとなったが、小学部では授業がわかりにくい、学習が難しいと感じている児童が2名いる。2名とも自分の得意なこと、苦手なことを客観的に見つめる力がついてきたこととあっての評価とも思われる。その気持ちに寄り添い、難しいと感じている内容について学習を補っていくように配慮していきたい。中高等部では、視覚支援の充実やICT端末の活用、教師の話方や手話がゆっくりと丁寧であることが学習内容の理解に繋がっている。小学部でもICT端末等の使用により、児童の「わかる」「できる」という気持ちが高まっていることがうかがえる。情報機器を用いての視覚支援は継続しながらも、後は児童生徒の学習の基礎となる言葉を育てていく観点からも、手話力の向上に努め、授業の質をより向上させていきたい。
学校関係者評価委員会の評価			*視覚支援や手話によるわかりやすい授業実践が自分を見つめる力にもつながっている。また、児童生徒はテレビや新聞からニュース等の情報を読み取り、得た情報を他者に語ることや自分の考えを伝えることができる力が必要だと思う。今後コロナ禍でオンラインによる学習支援や交流、将来の職場等でのテレワークやオンライン会議の機会が増えていくと思う。そのために必要な知識や技術を今のうちに獲得しておくように思う。		
学校関係者評価委員会の評価結果を踏まえた今後の改善策			*各教科間で連携しながら授業づくりを継続する中で、ICT機器や手話等の工夫によるわかりやすい授業を通じ、児童生徒が自分のことを客観的に見つめる力や獲得した必要な情報を他者に説明し自分の考えを伝える力を育成することは大切である。今後もICT機器の活用や手話等工夫しわかりやすい授業を行っていくことが課題である。そのためには互いに授業を参観し、授業実践力を高め合っていくべき。		
2 安心・安全な学校づくり	③保護者と連携し、幼児児童生徒が情報機器やインターネット等を安全に利用できるよう、指導支援の工夫を行う。	○指導課 幼小中高等部 寄宿舎	個に応じた内容を工夫して指導できた教職員が A 80%以上 B 70%以上 C 60%以上 D 60%未満	教職員=51% D	今年度は様々な教科の授業内容に関連させて工夫して指導したり、生徒が利用しているアプリ、タブレット端末やインターネットを利用する場面に応じた支援や指導することができた。各担任においては情報機器やインターネットの正しい使用について取り組んでいくことが課題である。また、学校全体のネット環境が十分でないため必要な時に必要な指導がむずかしいという意見も多数あり、環境整備も併せて進めていく必要がある。(舎)
			危険性や正しい使用方法を理解しているとした児童生徒が A 80%以上 B 70%以上 C 60%以上 D 60%未満	児童生徒=87% A	今年度児童は保護者や先生と確認したことやルールを守って使用しているがインターネットやオンラインゲームについての十分な知識がない中で使用している現状が伺えた。また、中高生の中には教科授業の中でインターネットの危険性などを学び、意識し、担任や他の教員から個々に指導されたことを実践できている生徒もいる。次年度に引き、情報機器やインターネットの使用について、危険性や正しい使用方法を繰り返し指導することが必要である。そのための授業や時間を生徒の使用状況やスキルに応じて設定していきたい。また、SNSでのトラブルも見られるので併せて指導する必要がある。
			安全な使用について学校がどんな内容を指導しているか知っている保護者が A 80%以上 B 70%以上 C 60%以上 D 60%未満	保護者=80% A	今年度はお知らせやメール、連絡帳、懇談等を通して、学校での指導が概ね伝わっていたが現状の指導内容が具体的に保護者全員に伝わっていない。次年度は学校全体として取り組みを明確にしてホームページや通信等で周知していくことが必要である。また、保護者と学校がこの課題を共通理解し、連携して指導していく体制づくりが必要である。
学校関係者評価委員会の評価			*児童生徒への指導にあたり教員のICTに係るスキルアップや舎のネット環境整備は喫緊の問題であり、早急な対策が必要である。スキルアップ講師の派遣や予算措置の依頼をしてもよいのではないかと。授業ではタブレット端末やインターネットを工夫して活用している様子があった。引き続き様々な取り組みがさらに共有されていくとよい。		
学校関係者評価委員会の評価結果を踏まえた今後の改善策			*授業で引き続きタブレット端末の適切な使用の指導を継続していくとともに、スキルアップのための研修や安全な使用ができるための指導について工夫が必要である。舎においてはネット環境の整備後には舎生もオンライン学習やインターネットの安全な使用方法について学んでいけるようにしたい。SNS等の危険性については問題となることを保護者と学校や舎が共有して取り組んでいくことが課題である。		
3 キャリア教育の推進	④本校キャリア教育全体計画を個別の教育支援計画に関連付け、個のニーズに対応した指導に生かす。	○進路指導課 幼小中高等部	学習活動の中でキャリア教育の視点に基づいた指導ができた教員が A 80%以上 B 70%以上 C 60%以上 D 60%未満	教職員=100% A	今年度通じて、キャリアの視点で授業に取り組んでいたようである。次年度からは、今年度作成を進めているキャリアパスポートを運用し、学習活動の中で活用することで、更に教員がキャリアの視点を意識できるのではないかと予想される。また、運用する中でキャリアパスポートの有効な活用方法についても共有していくこともできればよいと考える。教員のみならず、児童生徒も自分のキャリアの具体的な目標を意識して取り組んでいけるようにしていきたい。
			キャリア教育の視点についての説明を聞き、それに基づいた学習活動が行われていることを理解できた保護者が A 80%以上 B 70%以上 C 60%以上 D 60%未満	保護者=92% A	幼稚部では、前期、後期共に保護者へ普段の教育活動の意義についてキャリアの視点からわかりやすく説明されたことが成果につながっている。また、小・中・高等部に関しては、個別のキャリアの目標に対し、教員が行った具体的な指導内容や達成度について保護者により分かりやすく説明されているのではないかと考える。
学校関係者評価委員会の評価			*担任がキャリア教育における目標や取り組みについて保護者に丁寧な説明を行ったことが伺えた。キャリアパスポートは児童生徒が一番好きなことややってみたいことが明確になる。振り返ることで自己実現に向けて何をすべきか自分なりに方向性を見出すことができる。小・中・高を通じてコミュニケーションを回りながら運用できるのは素晴らしいと思う。キャリアパスポートの活用により、キャリア教育の一層の充実を期待したい。		
学校関係者評価委員会の評価結果を踏まえた今後の改善策			*今後もキャリア教育全体計画と個別の目標を照らし合わせながら取り組むとともに、キャリアパスポートの活用を通して児童生徒が自己実現に向けて方向性を見出すよう支援したい。また、個別の目標に対して授業や行事等で具体的にどのようなことに取り組んでいるのか保護者が理解できるように伝えていきたい。		
4 新しい生活様式における業務改善	⑤コロナ禍で必須となるリモート会議を効率的かつスムーズに行えるように業務改善する。	○総務 幼小中高等部 寄宿舎	リモート会議に向けた準備や参加及び出席を自分で行った回答の項目が A 4項目以上(80%以上) B 3項目以上(70%以上) C 2項目以上(60%以上) D 1項目未満(60%未満)	教職員=76% B	*前回のアンケートに比べ、職員のリモート会議に必要なスキルの向上が表れている。これは校内のwi-fi整備及び職員へ配付された一人1台のICT端末の活用から、コロナ禍によるリモート会議が定着してきたことが背景にあると考える。ZoomやTeamsによるリモート会議では、オンラインと対面とのハイブリッド型の会議も行われるようになるなど、職員の経験値が上がってきた。抵抗感がなくなった職員も少しずつ慣れてきていることが伺える。しかし、招待されたリモート会議に参加することに慣れてきていても、ホストとなり主体的に会議を開く機会はまだまだ少ないことから、機種の接続や画面の詳細な操作等に関する情報教育課員の力が重要な場面は多い。また、寄宿舎職員にはICT端末の配付がないことや寄宿舎にwi-fiが整備されていないことによる経験不足が未だ見られることが課題となっている。感染対策の他、ペーパーレス化や会場準備の縮小などの業務の効率化も進んできているところだが、さらなるリモート会議の経験の積み重ねや環境の改善が望まれる。
	学校関係者評価委員会の評価			*感染対策を実施しながら教員の業務改善を行うにあたり、教員のICT機器のスキルアップとネット環境の整備は今後に向けても必要である。	
学校関係者評価委員会の評価結果を踏まえた今後の改善策			*リモート会議への参加の経験値は上がってきているが、ホストになる場合やハイブリッド型の会議など複雑な会議では未だ情報教育課員の力が必要である。授業での活用やインターネット等の安全指導の面においてもスキルアップを図ることが業務の効率化につながる。引き続き経験を積みむとともに、会議等の効率的な持ち方について検討、改善していきたい。		